





## 三菱徴用工の故郷—平沢

— 3月19日、ピョンテ—

被爆者協会本部と保健社会部での緊迫した対談、証言聴取活動の疲労をいやす暇もなく、翌朝ソウルを後に、平沢へ到着した。

ここは三菱重工の朝鮮人徴用工たちの故郷で、平沢郡から三百名が広島へ連行され、うち二百名の会員が登録、現在百五、六十名が生計、約七十名が死亡、未帰還者は五十名とのことである。

10畳ほどのせまい部屋は、平沢・畿湖支部の会員と調査団を加え50名以上の参加で超満員。代表挨拶と団員紹介のあと、数組に分かれて証言を聞き、終わったときはすでに日が傾いていた。

出発前からの疲労と緊張のために、私は途中で仆れてしまい、二



(平沢で、中央が鎌田、右が辛会長)

大邱より高速バスで一時間余りで平沢に到着。趙判石、鄭基璋、安永千さんらの出迎えを受ける。金澤保健所長の案内で郡役所に郡守を表敬訪問したあと、診療所で診療状況を確認し、意見交換した。この施設は日本の核禁会議の寄金で建てられたが、平沢郡の保健所を兼ね、利用も多い。

## 韓国のヒロシマ・平沢

— 3月21、22日、ハプチョン—

大邱での出会いと証言について、二、三の補足をしておきたい。ここでは、もう一度平沢市で治療を受けたと強く訴えられたのが印象的。また、被爆者治療に好意的な嶺南大学を訪問、朴元圭学長より厚いおもてなしを受けた。

夜、鄭斗鎮さんのおいしい大邱リンゴの箱詰めを届けてくれ、翌朝からリンゴの旅が始まった。

時間ほど休ませてもらった。

## 大邱の被爆者たちを訪ねて

— 3月20日、テグ—

翌朝8時、平沢の金支部長らに見送られて平沢駅を出発。特急セマウル号で11時半に大邱へ到着。大邱・慶北支部役員の出迎えを受けて、支部事務所になっている季節園支部長宅へ向かった。

大邱での出会いと証言については下平作江さんの報告にゆずり、二、三の補足をしておきたい。

ここでは、もう一度平沢市で治療を受けたと強く訴えられたのが印象的。また、被爆者治療に好意的な嶺南大学を訪問、朴元圭学長より厚いおもてなしを受けた。

夜、鄭斗鎮さんのおいしい大邱リンゴの箱詰めを届けてくれ、翌朝からリンゴの旅が始まった。

大邱より高速バスで一時間余りで平沢に到着。趙判石、鄭基璋、安永千さんらの出迎えを受ける。金澤保健所長の案内で郡役所に郡守を表敬訪問したあと、診療所で診療状況を確認し、意見交換した。この施設は日本の核禁会議の寄金で建てられたが、平沢郡の保健所を兼ね、利用も多い。

## 韓国のヒロシマ・平沢

— 3月21、22日、ハプチョン—

大邱での出会いと証言について、二、三の補足をしておきたい。ここでは、もう一度平沢市で治療を受けたと強く訴えられたのが印象的。また、被爆者治療に好意的な嶺南大学を訪問、朴元圭学長より厚いおもてなしを受けた。

夜、鄭斗鎮さんのおいしい大邱リンゴの箱詰めを届けてくれ、翌朝からリンゴの旅が始まった。

大邱での出会いと証言について、二、三の補足をしておきたい。

ここでは、もう一度平沢市で治療を受けたと強く訴えられたのが印象的。また、被爆者治療に好意的な嶺南大学を訪問、朴元圭学長より厚いおもてなしを受けた。

夜、鄭斗鎮さんのおいしい大邱リンゴの箱詰めを届けてくれ、翌朝からリンゴの旅が始まった。

大邱での出会いと証言について、二、三の補足をしておきたい。

ここでは、もう一度平沢市で治療を受けたと強く訴えられたのが印象的。また、被爆者治療に好意的な嶺南大学を訪問、朴元圭学長より厚いおもてなしを受けた。

夜、鄭斗鎮さんのおいしい大邱リンゴの箱詰めを届けてくれ、翌朝からリンゴの旅が始まった。

大邱での出会いと証言について、二、三の補足をしておきたい。

ここでは、もう一度平沢市で治療を受けたと強く訴えられたのが印象的。また、被爆者治療に好意的な嶺南大学を訪問、朴元圭学長より厚いおもてなしを受けた。

## 在韓被爆者医療調査団報告

## 韓国被爆者訪問の旅

調査団代表 鎌田 定夫

(20日朝、平沢駅で)

出発前夜 — 3月16日 —

2月17日の長崎在韓での広島・長崎の合議決定より一カ月間、韓国で日本で、ドラマは準備の過程で次第に熟していった。

3月16日夜、東京・広島・長崎からかけつける仲間に福岡被爆者の仲間をまじえて結団式を開く。



(17日、ソウルの協会本部、右側2人目が辛会長)

自己紹介、経過報告、問題点の確認など二時間半に及ぶ真剣な協議が続く。多くが初対面のうえ、問題の複雑さ、深刻さのため、まだ不安を残しながら就寝する。

## 韓国被爆者協会訪問

— 3月17日、ソウル —

朝10時5分、JALで福岡空港を出発。11時20分、はやくも金浦空港到着。鄭基璋、黄応八、郭貴勳、金分順さんら約10人の被爆者たちの出迎えを受け、タクシーで城北区の韓国原爆被害者協会本部へ直行、さかん歓迎を受ける。この日は年一回の総会が召集され、45人の代表が各地より集まっております。せまい本部事務所は立錫の余地もない。簡単な交歓と昼食のあと、午後は近くの宿舎でソウル支部の被爆者たち30名ほどの証言と訴えを聞き、さらに協会本部で協会幹部との交流を行なった。ここでの辛泳洙会長の冒頭発言は、韓国被爆者のおかれていた深



刻な実情を反映した厳しいものであり、これに対する調査団側の発言も屈折したものとなった。

これには、韓国と日本の過去と現実の屈折した関係、在韓被爆者の歴史的課題、日本側の真剣な眼と連帯の模索が示されていた。夜は近くの大衆食堂で懇親会が開かれ、朝鮮料理に舌鼓をうちながら胸襟を開いて語りあった。

## 大学病院・福音病院で

— 3月18日、ソウル —

ソウル第二日目は韓国協会提供のマイクロバスで宿舎を出発、慶熙大学付属病院の訪問から始まった。ここでは大学側の好意で被爆者の無料診療が行なわれ、ちょうど一人の患者の手術中であつた。次に日本民間の資金援助で被爆者治療を行なっている福音病院を訪問、朴院長の説明を受けたあと入院中の重症患者に面会した。最後に、延世大学医学部を訪問し、季先生らの若い医師や医学生

たちの歓迎を受け、被爆者救援運動について意見を交換した。

## 韓国政府保健社会部で

18日夕刻、調査団一行は辛泳洙会長の案内でソウル郊外にある韓国保健社会部（日本の厚生省にあたる）を訪ね、李景雨医政局長と一時間わたって意見交換した。調査団は長崎・広島両市長よりのメッセージを提出したあと、用意していた「韓国原爆被害者救援に関する要請書」を渡した。その要請は、①日韓両国政府合意による渡日治療の継続拡充、②国勢調査の際の被爆者実態調査の実施、③原爆病院等の建設、医師研修、原爆手帳の適用その他である。

「本来は日米両国の責任において救済・補償すべきだが、同時に韓国政府の積極的救済策をお願いしたい」という私の発言に対し、「本当の原爆後遺症患者が何人いるのか、大半は老人病でもあり、区別はむずかしい。来年以降も続ける必要があるが問題です。ただし、皆さん方の民間レベルの渡日治療には反対する理由はない」というような答えが返ってきた。実態調査や具体的援護施策についても意見が交換され、一致点も皆無ではなかったが、残された課題の方がはるかに大きかった。

(23日、釜山で、中央が黄應八支部長)



## 残された課題と決意

— 最後の総括会から —

ソウルから釜山までの旅行中、ほとんど毎晩、宿舎で調査団全員の会合を持ったが、23日夜の釜山の総括会では二時間半に及び、極めて感動的なものになった。全員が今回の訪問と調査・交流の感想を述べ、我々にとって在韓被爆者、韓国とは何であるのか、今後への決意をこめて語りあった。二百余名の人々に会い、百三十名から生きた証言と訴えを聞き、その一人ひとりの顔を胸に焼きつけたが、それをどのように日本と世界に伝え、救援・連帯の運動を進めるか、課題は余りにも重い。



## 胸をえぐる証言と訴え

—大邱での交流から—

下平 作江



雨の福岡をJAL（日本航空）で離陸したのは3月17日の日曜午前10時5分でした。11時20分に金浦空港に到着、空は晴れていました。税関で手間どつたが無事に通過し、出迎える韓国被爆者協会幹部の方々と握手、挨拶をかわし、タクシーや自家用車に分乗、ソウルへ向かいました。この日はちょうど韓国全土から代表が集まって総会が開かれる予定で、私たちが到着したとき、協会本部はそれらの代表で溢れていました。

（写真の中央が下平、右は沼田さん）

さて、私たちの韓国での行程はソウル—平沢—大邱—陝川—釜山と続きますが、ここでは大邱での被爆者たちの出会いと交流を中心に報告したいと思います。

### 「40年間も待ちました」

3月20日朝、特急で平沢を出発し、11時30分ごろ大邱に到着、さっそく慶北・大邱支部へ向かいました。事務所は李碩園支部長のお宅で、ここに支部長はじめ25人位の会員さんが、私たちの到着を首

を長くして待つておられました。

柔道八段という支部長さんは、沢山のトロフィーや賞状をバックに巨体を傾けながら、流暢な日本語で挨拶をされました。

「日本の皆様ようこそ遠い韓国へいらっしやいました。われわれは40年の長い間待ちました。今更と言った感じがします。しかし、……私たちの長い間の苦しみを聞いて記録に取って、そして援助の手をさしのべてください。」

すこし皮肉のまじった言葉は私の胸を深くえぐりました。そして支部長の挨拶が終わるか終わらないうちに会員たちの質問が矢つぎ早に出され、どれから答えていいかわからない状態です。長い間のつかえを一気に吐き出すような様子は、何とも言いようのないつらさをおぼえます。支部長が何やら大きな声で言います。すると一人の会員が、スッと立って言います。

「日本の被爆者は、治療はただし、生活費はもらっているし、死んだ人には補償はあるし、同じ

日本で被爆しながら、われわれには何の補償もなく、苦しい事ばかり、同じ人間でありながら、どうしてそんなに差別するのですか？」

### 加害国の国語で語るつらさ

松尾松良さんが日本の被爆者を代表して答えられました。納得いかなんか様子。そこで井下春子さんが韓国語で補足説明され、やっとわかれたようでした。

言葉の違いのむかしさを感じました。やはりその国の言葉で話さないとなかなか通じません。

加害国日本の国語を通して語らせようとするこの非情、つらさ……。

ある男性の会員が訴えました。

「自分は一日とて待てません。一日も早く広島の原爆病院に呼んで治療してください。……」

本当に悲痛な声でした。

### 生と死のはざまから

「両親は死に、兄と自分は助かったが、兄は韓国に帰って二年目に髪は抜け、苦しみながら死んでいきました。私もいま病気で苦しんでいます。」

「日本に行かなくてもいいのです。この韓国の地で治療ができ、安心した病院生活を送れるようにしてください。……」

「ここではいま百パーセントの

治療費が必要なんです。身体の具合が悪くても、お金がなくて病院に行くことができません。入院すると何百万円のお金がいります。10パーセントでもよいから安くすむ方法はないものでしょうか」

「調査調査と言っても、私たちには何の利益もありません。ここまでするのに運賃がかかります。調査ばかりに終ってしまいます。現在もらっている薬をのむと副作用で身体中が痒くなったり、ブツブツができます。飲まないとい苦しいし、このままではいつ死ぬかわかりません。どうか私を広島に呼んで下さい。お願いします。」

悲痛な声で哀願する様子は筆で書き表す事はできません。この方たちは、今なお戦争の傷跡を引きずり、生と死のはざまに生き、40年たった現在もまだ戦争は終わらないのだなあと痛感しました。

「日本の皆様、どうか私たちを助けて下さい。そしてわれわれに代って平和を、戦争反対、核兵器廃絶を叫んで下さい。」

声なき声に送られながら車中の人となりました。後をふり向くといつまでも手をふっています。

「サヨウナラ、また来て下さい」の声を背に次の訪問地陝川へと向かいました。

（長崎市）

（

## 苦しい韓国被爆者

—その中に明るいニュースも—

松尾 松良

在韓被爆者医療調査団に参加の機会を得たが、事前には予備知識としてパンフレットを読んだ程度だった。だから、実際に韓国原爆被害者協会の被爆者たちが調査団をどのような態度で迎えてくれるか、不安な気持ちで三月十七日福岡空港を出発した。

金浦空港には被害者協会の人々や延世大学の方々が出迎えられ、



不安の気持ちが少しはとれた。車に分乗して被害者協会に直行した。この日は年に一回の総会の日で、五支部の役員の方々とお会いすることができ、名刺交換を行った。私が実際に被爆者と面接し証言記録をとったのは、ソウル、平沢、大邱、陝川、釜山の五支部で十七名の被爆者たちだった。このうち二名が長崎での被爆者で、十五名が広島被爆者である。

日本語ができない人には通訳を介するので、時間がかかるし意志疎通が十分でない。やはり韓国語を知らなければならぬと思った。広島被爆者が大多数で徴用された方が多く、やみ船で帰国した人々、何日もかかってやっとの思いで故郷に帰った人が多く、平沢や陝川では、ほとんどの人が農業か失業中であつた。

被爆者は健康な人にくらべ身体に病気を抱えており、それでも毎日の生活がかかっているから働かなければならぬし、自己負担で病院にもかかれぬ状態である。ソウルや陝川では、わずかながら

日本の民間団体からの支援があり、大学の附属病院や福音病院、陝川原爆被爆者診療所が無料で診療を行っていたので、所在する被爆者はいくらか幸わせた。

渡日治療も人員の選定や日本における治療期間二カ月の制限があり、多くの被爆者がある程度治るまで入院させてほしいと訴えた。

平沢で、「何かご希望はありますか」とたずねると、二人の被爆者から「はやく死にたい」と答えられ、何も言えない気持ちだった。それは、働かないと日常の生活ができず、体が悪くても病院にかかる金がない、それでも働かなければならないためである。手をにぎり合せて激励し、「元

## 逆境の被爆者の肩代りを

金 燦 鎮

（前略）三月十七日から二十四日

韓国被爆者調査ではほんとうにくらうさまでした。（中略）

ソウル—平沢—陝川—大邱—釜山とはんとお疲れだったと思います。私もはじめて被爆者と対面して当時の模様を聞くことができましたが、ほんとうにびっくりし

気を出して下さい」と言って別れたが、後で自分は何をなすべきか結論を出せないまま自問した。

釜山の仲良し被爆者同年輩の女性四人の証言をとったが、非常に明るいことに気がつき、「貴女方が仲が良く、明るいのはなぜですか」とたずねると、「広島でも隣りどうしにいたし、帰国してから同じ町内にいます。生活が苦しい時も、身体が悪い時も、困った時にはお互いに助け合い、貧しいけれど毎日を楽しみ方向に持って行くよう心掛けています」との答えがあった。

暗い中で明るいニュースである。（福岡市被爆者の会会長）

ました。（中略）

その後、NBCの方々と三人で全羅南道宝城郡の各町々を訪問し、長崎三菱造船、沖の島の被爆者とも会いました。なくなった人々も多く、木浦・光州・忠清南道・大田市・論山市・練部台と寄って調べながらソウルへ来ましたが、表



～核兵器廃絶国際署名の呼びかけのために～

あなたの名前を

作曲 園田鉄美

d=70 (Rock) (リズム 16 Beat)



(1985.3.9)

一. あなたの名前を かいとくたさい  
ひとつのなまえに ひとつのいのち  
あなたの名前を かいとくたさい  
ひとつのなまえに ひとつのくらし  
あなたのぬがいを かいとくたさい  
ノーモア ヒロシマ ノーモア ナガサキ

二. あなたの名前を かいとくたさい  
ひとつのなまえに ひとつのいのち  
あなたの名前を かいとくたさい  
ひとつのなまえに ひとつのくらし  
あなたのぬがいを かいとくたさい  
ノーモア ヒロシマ ノーモア ナガサキ

三. あなたの名前を かいとくたさい  
ひとつのなまえに ひとつのいのち  
あなたの名前を かいとくたさい  
ひとつのなまえに ひとつのくらし  
あなたのぬがいを かいとくたさい  
ノーモア ヒロシマ ノーモア ナガサキ

## 歌で呼びかけ 核兵器廃絶国際署名を

園田鉄美

に現れていないたくさんの被爆者がいることがわかりました。また、次々となくなっていくのもわかりました。(未亡人の証言) 詳しく調べるには相当の日数がかかるし、また、もっと早く、詳しく調べる道義的な義務的なものを感じました。表面だけでなく、もっと深くまで調査して被爆者を助けるべきだと切実に感じました。

※ 金塚鎮さんは調査団に加わったNBCの通訳を勤めた方です。

逆境の被爆者の肩がわりをする役割が必要だなあとと思う心やまずでありました。(中略) 今年また長崎に行く予定ですが、そのときは立ち寄らせていただきたいと存じます。(ソウル市)

私は長崎センター合唱団で活動しているものです。私は、これまで創作(主として作曲)を始めて十二年近くなりますが、今度、かねてより暖めていた反核の歌が二曲ほど完成いたしましたので、ぜひ多くの方々のご批判を仰ぎたいと思います、同封のとおり楽譜とカセットテープを送らせていただきます。

今年、被爆四十周年、折りしも反核の国際的世論の大きく盛りあがる中で、国際署名の呼びかけ、また原水禁世大会の長崎での開催など、私自身被爆二世であり、三人の伯父を原爆で失っていることもあり、今年はずいぶん長崎からうたごえを世界に伝えたいとの思いをこめて創ったものです。「あなたの名前を」(A面)は、核兵器廃絶国際署名の呼びかけのために創ったものですが、これは長崎で「ヒロシマ・ナガサキからのアピール」が発表された、ちょうどその一か月後(三月九日)にできたものです。曲は、若い人や外国の代表(文字どおり国際署名のうたです)にも歌ってもらえるようにと、明るくリズムミカルな、覚えやすい曲にしてみました。街頭署名や宣伝カーなどで使うにはもってこいではないかと思

ます。「ナガサキから」(B面)は「あなたの名前を」の翌日にできたもので、独唱を主体としてナガサキの被爆者の心を切々と歌ったものです。(「ナガサキから」は「証言」第14号に掲載) 二曲ともすでに合唱団でも歌いひろめているところですが、それ以外にもカセットテープの注文があったり、マスコミの取材を受けたりで、今、この曲をさらに大きくひろげようと考えているところです。

※ テープは編集部(録田)にあります。試聴ご希望の方はお知らせください。



## 長崎市民へ

アテネ市長からの  
メッセージ

長崎という悲劇の街に聖火が到着するにあたって、市長と市民に心からのあいさつをおくりします。現在、かつてないほど人類に対する危機は高まっています。軍拡のエスカレーション、特に核兵器のエスカレーションは、人類と文明に対してきわめて重大な脅威となっています。今日アテネの市長と市民は、長崎市民に心からの思いを寄せています。そのことによつて私たちの連帯を表明し、長崎市民の皆さまと共に、声を合わせて地球上の超大国に対しノーモア・ナガサキ・ノーモア・ヒロシマを訴えます。

(これは、オリンポスの聖火とともに長崎に届けられたアテネ市長のメッセージです。詳細は「ヒロシマ・ナガサキの証言」14号の「オリンポスの平和の火―灯台建設運動」(平野妙子)を参照してください。)



# 平和教育で「核」否定へ — 埼玉県大宮高校 の実践 —

昨年、大宮高校に勤めていた知人と会って平和教育について話し合った時、大宮高校でも熱心に平和教育がなされていることを知りました。そこで「証言」誌を送っていたところ、実践報告のコピーを頂きました。一九八三年の実践ですが、平和教育はやはり大事だという実証がなされていますので、ここに紹介します。実践をされたのは埼玉県立大宮高等学校の横田洋さんです。(編集部・濱崎)

## 〇「核」問題について

一九八二年の全国教研で福島県のある高校二年男子が、自衛隊の核武装についてのアンケートで、37%が「核を持つべきだ」と答え、たのに衝撃を受け、同時に、無知ゆえの回答ではないかと思った。そこで、大宮高校で八三年度に同趣旨のアンケートを三年生にしたところ、45%が核武装すべきだと答えたということである。

「私の予想以上に生徒たちが健全であることを知って心強く思った。しかし、一概に喜んでばかりいられない面もある。『核武装すべきだ』と答えた生徒も『すべきでない』と答えた生徒も、一様に広島の具体的惨状や核兵器の現状についてはほとんど無知と言ってもよい状態であることだ。広島惨状については30%の生徒が、『核』の現状については45%の生徒が無答であり、回答を寄せた生徒も大半は誤った知識しか持っていない(中略)核兵器拒否もただ恐ろしいという感覚的・感情的なものでしかないように思われる。



私はこのような結果に学びながら、生徒たちに『にんげんをかえせ』を見せ、また核兵器体系の現状について話して聞かせた。その後、感想を書かせたのだが、それを読んでいううちに『核武装すべきだ』と答えた生徒たちのほとんどに意識の変化を見ることができた。つまり『核』を否定する方へと変わったのである。

日の丸・君が代についても高校と中学校の実態を調べ、平和教育が科学的・系統的に行われなければならないと結論づけてある。

## 「長崎の心つたえて」を読む

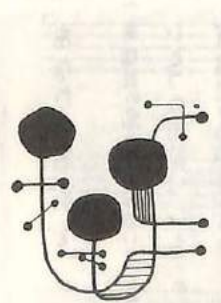
濱崎 均

長崎の証言の会の事務局次長であり、現職の小学校教諭として平和教育に取り組みむ今田斐男さんが本を出版した。「長崎の心つたえて」である。

実にユニークな書名のつけ方である。序文の中で山川剛さんは次のように書いている。

「『ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャ、ノーモア・ウオ』という長崎の被爆者の悲願を教育の柱にすえて実現すること、まさにこのことが、今田先生の、『長崎の心』を伝えることにはほかならない。

修学旅行の語りべとしての役割も兼ね今田さんの切実な気持ちを表したものである。本書は、著者がこれまでに各方面で執筆したものや新聞に報道された著者に関する記事を五部にわたって整理したものである。その項目は、



第二章 紙芝居で伝える被爆の心  
第三章 修学旅行生に語る長崎の心

と、整然としたものである。最初から一冊の本にするために書いたのではないのに、このように整理できるということは、今田さんの実践が常に方向づけを持っていたということであろう。

今田 斐男  
領価 一五〇〇円

# 長崎反核平和日記 (10月～3月)

事務局日誌と核実験抗議座りこみは、別にまとめて掲載しています。

- 10月16日 長崎市は85年夏にパチカンで原爆展を計画。これを日本カトリック教会長崎教区が支援することになった。
- 10月17日 鹿児島県南指宿中学校が被爆体験談を聞くことを校長の判断で中止した。
- 10月18日 長崎市はブラジル在住の長崎の被爆者の状況調査を始めることにした。
- 高知県須崎中学校修学旅行団が原爆病院を慰問した。今年で24回目。
- 10月21日 「長崎原爆の記録」発行(元大村海軍病院院長泰山弘道著 あゆみ出版)
- 10月24日 核実験に抗議する長崎市民の会が座りこみ10年を記念して「核実験抗議—10年の記録」を発行した。
- 10月28日 長崎平和推進協会主催「市民のつどい」が開かれた。原水爆禁止長崎連絡会が「反核長崎のひろば」を開いた。

- 10月30日 「鎮魂歌—ヒロシマ・ナガサキ」(砂田明)が公演された。(長崎新聞文化ホール)
- 10月31日 山里小学校が35回目の平和記念式典を行った。
- 三原町片岡さん宅の被爆杉が伐採されることになり、幹の部分が保存されることになった。
- 11月1日 長崎放送(NBC)は科学技術庁提供の原子力PRのラジオ番組の放送中止を決めた。
- 11月10日 原普協が第三回シンポジウムを行った。
- 11月11日 長崎大学学生の平和意識調査がまとまった。
- 11月14日 下の川改修工事で「被爆の証」の品物が見つかった。
- 12月1日 くらしと平和を守る婦人の会が長崎市民会館で「第八回母に聞く被爆体験」の会を開いた。
- 12月2日 県手帳友の会が朝鮮民主主義人民共和国の被爆者と交流する計画を決めた。
- 西ドイツの第二ドイツテレビ局が「長崎の被爆」を収録した。佐世保市長が外務省に非核三原則堅持を要請した。
- 12月5日 長崎市の核実験抗議電報が5日で三〇〇回めとなった。
- 12月7日 県平和委員会などが長崎市民観光通りで「戦争展」を開いた。

- 12月8日 長崎市は核保有五か国へ、核実験全面禁止、核軍縮交渉の再開などの世界恒久平和実現の要請文を送った。
- 12月14日 「長崎原爆シリーズ」(坂口便作・あさき書店刊)が第35回国際児童図書展示会で推薦図書に選ばれた。
- 12月24日 長崎市は政府に核実験全面禁止を緊急重要課題として取り組むよう要請した。
- 12月27日 中国対外友好協会の代表団が、長崎の原爆資料館を見学した。
- 12月29日 「原爆の図展記録集」が、「原爆の図を見る会」から発行された。
- 1月3日 長崎新聞は被爆40年特集として「ナガサキの使命 いま、力の結集を」という二ペーシの特集をした。
- 1月15日 韓国高校修学旅行団が長崎の原爆資料館を見学した。
- 1月17日 ポーランドのポイチェフ・ハバシンスキ大使が平和公園を訪れ、平和モニュメント寄贈に努力すると話した。
- 2月11日 第8回2・11平和教育研究集会が開かれた。
- 平和カレンダー(長崎平和サークル作成)が発行された。
- 2月17日 「平和を考える会」(代表・今田斐男)が結成された。

- 活動中との報道がなされた。
- 2月21日 長崎市川内町のラジオゾンデ落下地点に標識が立てられた。
- 原水爆禁止長崎連絡会は「原水爆禁止1985年世界大会」の長崎準備委員会を発足させた。
- 2月24日 「反核歌と文学の集い」が教育文化会館で開かれた。
- 3月1日 三・一ビキニデーの集会在長崎・佐世保などで開かれた。
- 3月4日 被団協は被爆者援護法制定を求めて全国行脚に出発した。
- 3月6日 長崎市は如己堂の永久保存を決めた。
- 3月7日 中国青年団代表一行百人が平和祈念像に献花し、原爆資料館を見学した。
- 3月14日 秋月辰一郎先生がローマ法皇より「聖シルベストロ教皇騎士団勲章」を授与された。
- 3月20日 長崎市教委は平和教材をさらに整備することを決めた。
- 3月26日 在韓被爆者六人が治療のため長崎入りした。
- 「広島・長崎を考えるゼミナール」(全国大学生協連合会)が開かれた。
- 3月31日 「長崎の心つたえて」(今田斐男著)が出版された。(※その日に報道されたものを含む)